| えんぽとたんぽの始発駅<br>里山ビオトープ二俣瀬 | 会 報　第60号 | ２００６年7月２３日<br>里山ビオトープ二俣瀬をつくる会<br>編集責任者：西原 一誠 |
|---|---|---|


**1. 活動報告（事務局　記）**

― ６月２７日（火）田んぼの除草　今井会長と原田事務局長
― ６月２８日（水）「やまぐち県民活動きらめき財団」へ岡村会員作成の助成金申請書を提出
― ７月２日（日）草原ゾーンへ石橋設置、駐車場の草刈を行いました。（参加会員１９人）
― ７月７日（金）中国電力㈱宇部電力所＆善和園にて草刈り
― ７月１２日（水）厚東川水系森・川・海水環境ネットワーク協議会総会
― ７月１５日（土）読売新聞にて「第１３回コカ・コーラ環境教育賞主催者賞」受賞
― ７月１５日（土）田んぼの草取りとエコアップで溜池のはびこった植物の除去を行いました。（参加会員２０名）
― ７月１５日（土）午後の里山自然観察隊は川の探検でした。
隊員２３名、保護者１６名、会員１４名で、たくさんの魚と水生昆虫を観察しました。

**２．今後の予定（事務局　記）**

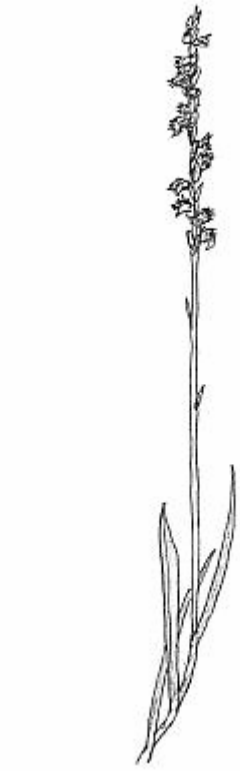
◎ 見学者
― ４月より　ネイチャークラブが毎月ビオトープで散策活動をされます。岡田さんより（案内者不要です。）

◎ 行事
― ８月６日（第一日曜日）の活動（従来の活動）
― ８月１９日（第三土曜日）の活動（従来の活動）
夜は里山自然観察隊の第５回目の観察活動（夜の魚と水生昆虫）

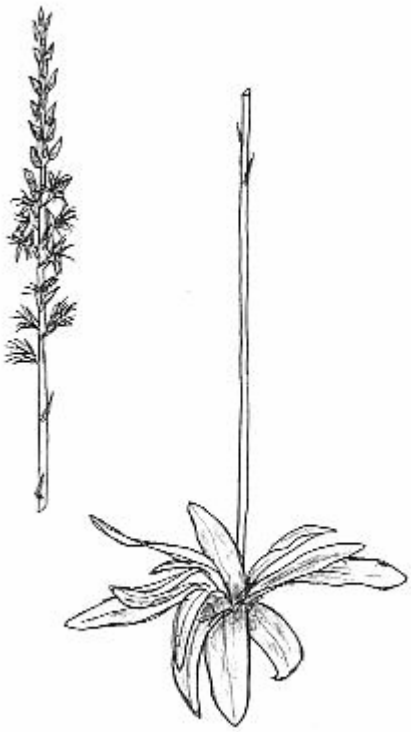
**３、ビオトープ関連（ビオトープ周辺の植物）　美濃和　信孝**
**ネジバナとノギラン**

ネジバナは芝生などによく生えているラン科の多年草です。今ごろの季節、ピンク色の花はよく目立ち、らせん状に小花が付くようすは印象に残りやすいので、少しでも草花に興味のある人は必ず名前を知っているくらい人気のある植物です。細くてしっかりした根生葉は、少々の芝刈りくらいでは残り、花が咲けば刈るのはかわいそう、ということでよく芝生にネジバナ群落ができていたりします。ところで、この草の葉も根も、植物体の割には貧弱で、よくこんな太い数本の根で花を咲かせ、実を結ぶものだと思わせますが、それはこの植物と菌類が共生しているためです。
このように根に共生している菌類を菌根菌といいますが、ネジバナはこの菌から栄養をもらって花を咲かせるわけです。さらに、この菌は芝の根に共生する菌であることから、ネジバナは芝の根とその菌根菌がないと単独では育ちません。ネジバナ―芝―菌の三者が繰り広げるドラマが土中で進行しているわけです。ほかのランの仲間もこのように菌類と共生しているものが多く、いずれも根は太くて短いことが特徴です。
ノギランは北海道から九州に分布する多年生のユリ科の草本です。今ごろ20～40cmの長い花径を伸ばして、クリーム色の穂状花序をつけます。ランと名前がついていますが放射状の6枚の花弁を持ったユリ科の植物で、花びらの先の尖ったようすがイネ科植物の種子のノギに似ていることからノギランという名前が付いたようです。湿原の周辺や路傍など、やや湿った場所に生育し、ビオトープでは須賀河内川沿いの地下水が浸み出している斜面に群生しています。秋にはリンドウが咲く

場所です。私は初めてこの植物の葉を見た時には、雪国でよく見られるショウジョウバカマにそっくりだったので、ショウジョウバカマかと思いましたが、山口県の暖地にあるわけがないし・・と悩んだ記憶があります。葉は全てロゼット状の根生葉で、一年中葉をつけています。ノギランは、夏でも背の高い植物の日陰にならないような通常の植物が生育しにくい湿った環境に適応した植物であるといえます。



ネジバナ（ラン科）



ノギラン（ユリ科）

**４．ビオトープ関連　(会員の声)**

**里山ビオトープ活動に参加して　　（　田村　勝芳　記）**

６月２７日の宇部日報にゴッホの庭と命名されたひまわり畑の記事が写真入りで紹介されました。これはニ俣瀬校区ふるさと運動実行委員会が行ったものでニ俣瀬ふれあいセンターの入口の休耕田を利用してひまわりの種を植えひまわりの庭にすることにしたものです。原田賢治会長や藤村武昭さん等のビオトープ会員が協力されたニ俣瀬婦人会の皆さんと一緒に紹介されていました。

ひまわりと言えばフインセント　フアン　ゴッホ（１８５３－１８９０）の名画が有名なのでこれにちなんでゴッホの庭として立派な立看板が２枚取り付けられました。ゴッホの名画は１８８８年頃に南フランスのアルル地方で描かれ　一時期共同生活をしたゴーギャンの部屋に飾るために贈ったとされています。ゴッホのひまわりはロンドンのナショナルギャラリー、アムステルダムのゴッホ美術館日本の東郷青児美術館に名画があります。

日本の名画は１９８７年にロンドンのオークションで安田火災海上（株）が５８億円で購入したものである。ひまわりは真夏の太陽を追うようにして生き急ぐ花であり色彩の輝きとタッチの力強さに憧れと夢が見える。ゴッホ以上にこの花にふさわしい画家はいないと言われている。

７月中旬より開花するひまわりは暑い夏を楽しませてくれる花であり二俣瀬のゴッホの庭もビオトープ会員の目の保養になると楽しみにしている。

**次回　会員　　さんにお願いします.**

## ５．里山自然観察隊（７月１５日、隊員２３名、保護者１６名、会員１４名）
## 川の探検

A 班（ビオトープの観察）

今年の水棲生物の観察は、４つのグループ分けをして、それぞれのメンバーが協力して魚などを取るようにしました。それは、最近の子ども達は魚取りをした子も少なく、まったく網の使い方すらできない子どももいるので、魚を取る技術の伝承も自然観察隊の重要なテーマの一つと思われるからです。

今年の須賀河内川は、例年になく水量が多く、胸近くまで水に浸かっての魚取りとなりましたが、たいへん暑い日だったので、みんな抵抗なく川の中での魚取りに興じていました。水量が多かったため、魚の数はそれほどではありませんでしたが、種類はほぼ例年通りのものを取ることができました。

魚では、何人かの子どもがビオトープ脇の流れの緩やかなところでオヤニラミの稚魚を取りました。

オヤニラミの成魚はビオトープの堰堤の下で昨年、一昨年と取りましたが、堰堤の上では今年が初めての記録となりました。また、婚姻色と追星の出たカワムツのオスの成魚（15㎝)をビオトープ上流の堰堤の下で捕まえることができましたが、こんなに大きなカワムツがいるということがわかったことも収穫でした。水棲昆虫では、平べったいクモのような形をしたコヤマトンボのヤゴをたくさんの子どもが取っていました。これも須賀河内川の豊かさの証しであろうと思います。

・水流が早いところ　カワムツ、カマツカ、オヤニラミ
・遅いところ　メダカ、フナ、ドジョウ、ミナミヌマエビ、タイコウチ、ミズカマキリ、アメンボ
・川の底　ドンコ、モクズガニ、ヤゴ(コヤマトンボ、ハグロトンボ、その他)

**（美濃和　信孝　記）**

B 班（清瀬峡登り）

清瀬峡登りは今回が初めての企画です。観察隊員５名に大人が６名で挑戦しました。草原ゾーンの堰堤から川に入るといきなり泳ぐような深さで、冷水の洗礼に喚声が上がります。ため池ゾーン横のヨシが刈り取られたばかりの区間は足のもぐるような砂底で、堆砂しやすい場所にヨシが茂るのがよくわかります。隊員は元気いっぱい、大声で叫び、手網をふるいながらどんどん進みます。

ビオトープを過ぎるといよいよ滑りやすい岩床が出現。声をからしてスリップの注意を促すそばから見事に転倒！隊員に支給したヘルメットがさっそく役立ちました。痛い目をみて学んでいくのでしょうが、こっちは気が気ではありません。あらためて、大人と子供がマンツーマンで組むことにします。

２つほど簡単な落差を越えるとだんだん林の中へと入っていきます。このころには隊員それぞれの特徴が行動に現れてきます。ひたすら魚の数を追求するもの、どんどん先に進むもの、ゴーグルをつけ顔を伏せたまま泳ぎ続けるもの・・隊列も広がり気味。張り出す枝をくぐり抜けると父滝に到着。父滝の滝つぼは大人でも油断すると背がたたないほど。投網を打つと１５ｃｍオーバーのカワムツがとれました。

いよいよ滝登りです。まず大人１人が登り、ロープを垂らします。取り付き部の足がかりがなく、子供だけでなく大人にもなかなか歯ごたえがある滝でしたが、飛沫を浴び、歓声を上げながらなんとか突破。

続く母滝もしっかりした滝つぼがありますが、もうどんどん登っていきます。

田んぼ横のトロを過ぎると林の中の岩床帯となり、清瀬峡の名に相応しい景観が出現。童滝、寄合滝、二俣の滝と次々に制覇して終点に到着。途中、童滝の滝つぼではしゃぎすぎた一隊員が岩角で指先を切ってリタイアしたのが残念ですが、４人が元気に登り切りました。

最終的に採取できたのは、カワムツ小 102、カワムツ中 10、カワムツ大 2、ヌマエビ９、モクズガニ１、イトトンボのヤゴ３、カワニナ３。カワムツは岩床部ではやや少ない印象でしたが全区間にわたって採取できました。魚とりに専念した隊員は１人でカワムツ６０尾をとりあげトップ賞獲得。

大人も子供も結構な達成感が味わえる企画で、今後も改善しつつ継続できたらよいと思いました。元気すぎる隊員が相手では大勢は無理ですがね！

**（関根　雅彦　記）**

## ６．来訪者の声　（東屋のノートより一部抜粋）

今月はありませんでした。

## ７．会よりの連絡事項

8月１９日（土）の観察隊は夜の水棲動物厚東川編です、夜はキャンプで会員の親睦を深めたいと思います。当日は、農協コンクール用「かかし」の制作も行いますので、皆様の協力をお願い致します。

## ８．編集後記

会報も 60 号となりました。これも西原様のご苦労のもとで此処まで続けられた事だと敬意を表します。これからもよろしくお願いします。もうこれほどの年月が過ぎたのだと新ためて感じました。ただ漫然と参加して自分自身自己アップ出来ず これでいいのかと思いつつ、でも少し目の向け方が変わって来たかなと？ネムノキ ナツツバキもしっかり根を下ろし花をつけている。これからも元気で゛参加できます様に。

（松本　フデ子　記）